

2020年（令和二年）

7月10日（金曜日）

毎週（金）14:00発行

発行所 （一財）日本エネルギー経済研究所
石油情報センター電話（03）3534-7411（代）
FAX（03）3534-7422〒104-8581 東京都中央区勝どき1-13-1イヌビル・カドキ11階
ホームページ <https://oil-info.iej.or.jp>

■ 概況

6/25～7/1のNYMEX・WTI先物市場は、38.49～39.82ドルの範囲で推移した。

7月2日は、6月の米国雇用統計が非農業就業者数・失業率ともに堅調であったことから、続伸し40ドル台を回復した。ただ、米国南西部を中心に新型コロナの感染再拡大の動きが上値を重くした。8月限終値は前日比0.83ドル高の40.65ドル。

週末3日は、米国独立記念日の振り替え休日のため休場。

連休明け6日は、前営業日の反動、新型コロナの感染再拡大への懸念などから、3営業日ぶりにわずかに反落した。ただ、世界的な株高や米国景況感指数の好転などを背景に、上昇要因も見受けられた。8月限終値は前週末比0.02ドル安の40.63ドル。

7日は、新型コロナ感染の再拡大への懸念から、ごくわずかに続落した。対ユーロのドル安も、原油先物の割高感を生じた。市場は、翌日の米国原油在庫の発表を待っている状況にある。8月限終値は前日比0.01ドル安の40.62ドル。

8日は、この日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の週報で、前週末の原油在庫は積み増しとなったものの、ガソリン在庫が480万バレル減と取り崩しとなったこと、また、中国上海株式市場で2年5か月ぶりの高値記録したことを好感、3営業日ぶりに反発した。8月限の終値は前日比0.28ドル高の40.90ドル。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(8月渡し)は6月25日～7月1日の間40.30～41.90ドルの範囲で推移した。7月2日42.20ドル、3日42.80ドル、6日43.10ドル、7日42.60ドル、8日42.80ドルと推移した。

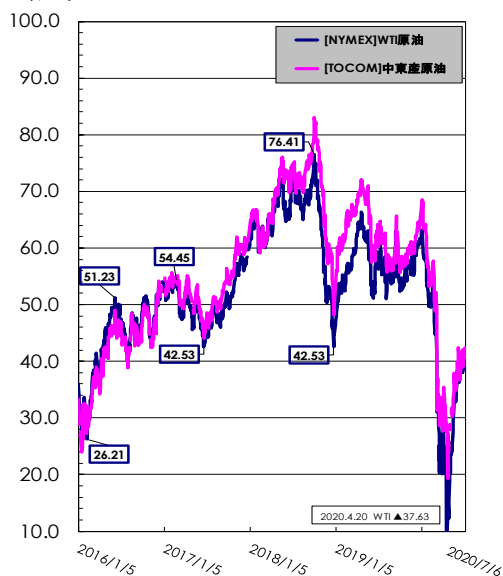
為替は6月25日～7月1日の間107.06～108.12円の範囲で推移した。7月2日107.49円、3日107.54円、6日107.65円、7日107.30円、8日107.69円で推移した。

財務省が7月7日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、6月中旬の原油輸入平均CIF価格は、16,168円/klで、前旬比277円高、ドル建て23.77ドルで前旬比0.28ドル高、為替レートは1ドル/108.17円。

そのような中で、7月6日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.2円の値上がり、軽油も同0.2円の値上がり、灯油は3円の値上がり(18㍲ベース)だった。ガソリンは8週連続の値上がり、軽油は8週連続の値上がり、灯油も7週連続の値上がりだった。この週(7月第1週)の原油コストは値上がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに全社1.0円の値上げとなった。

原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	6/28 ~ 7/4	2,400 ▼ -72	▼ -
	トッパー稼働率 (%)	"	61.3 ▼ -1.8	▼ -
	原油在庫量 (千kl)	7/4	13,516 ▼ -263	▲ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	7/6	42.35 ▲ 3.25	▼ -19.4
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	7/6	40.63 ▲ 0.93	▼ -17.0
	原油CIF単価 (\$/bbl)	6月中旬	23.77 ▲ 0.28	▼ -49.31
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	16,168 ▲ 277	▼ -33,971
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	108.17 ▼ -0.58	▲ 0.90
	外国為替TTSレート (¥/\$)	7/6	108.65 ▼ -0.41	▲ 0.89

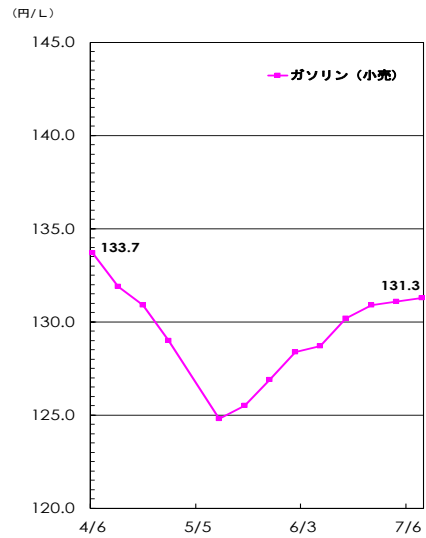
(\$/b)



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比
需給	生産	6/28 ~ 7/4	778 ▼ -54	▼ -
	輸入	"	n.a.	n.a.
	出荷	"	850 ▲ 24	▼ -
	輸出	"	0 ➡ 0	▼ -
	在庫	7/4	1,613 ▼ -72	▲ -
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	6/30 ~ 7/6	40.8 ▲ 1.8	▼ -18.6
	先物 [期近物/終値]	6/30 ~ 7/6	39.5 ▲ 0.6	▼ -16.9
	(TOCOM/中部)	7/6	40.0 ▲ 1.5	▼ -18.0
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/6	131.3 ▲ 0.2	▼ -14.5

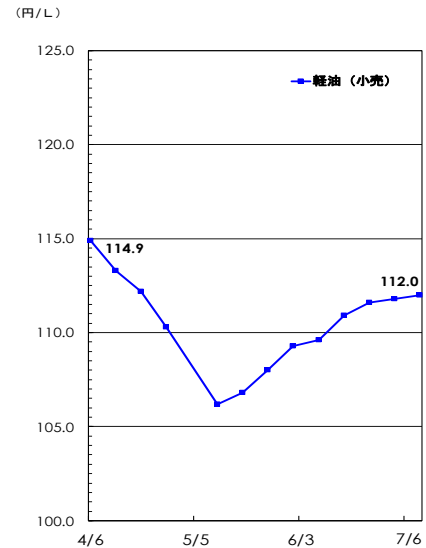
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

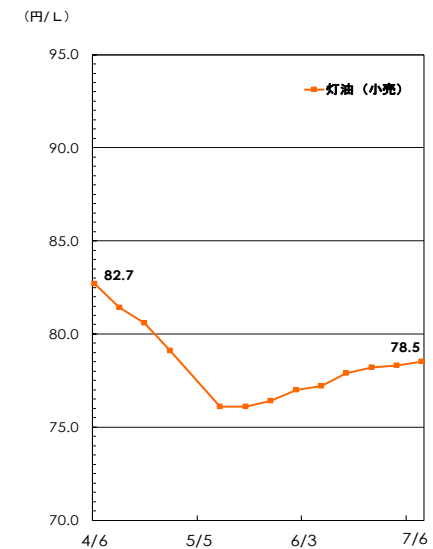
軽油		今週	前週比	前年比
需給	生産	6/28 ~ 7/4	651 ▲ 9	▼ -
	輸入	"	n.a.	n.a.
	出荷	"	533 ▼ -73	▼ -
	輸出	"	34 ▲ 34	▼ -
	在庫	7/4	1,556 ▲ 84	▲ -
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	6/30 ~ 7/6	43.0 ▲ 2.1	▼ -19.2
	先物 [期近物/終値]	6/30 ~ 7/6	46.2 ▲ 0.7	▼ -16.3
	(TOCOM/中部)	7/6	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/6	112.0 ▲ 0.2	▼ -14.8

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比
需給	生産	6/28 ~ 7/4	72 ▼ -91	▼ -
	輸入	"	n.a.	n.a.
	出荷	"	58 ▼ -63	▼ -
	輸出	"	70 ▲ 70	▲ -
	在庫	7/4	1,741 ▼ -56	▲ -
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	6/30 ~ 7/6	42.3 ▲ 2.8	▼ -19.2
	先物 [期近物/終値]	6/30 ~ 7/6	40.3 ▲ 0.3	▼ -17.0
	(TOCOM/中部)	7/6	41.5 ▲ 2.2	▼ -17.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	7/6	78.5 ▲ 0.2	▼ -12.7



■ 関連情報

1 海外/原油

7月8日のNYMEX市場WTI先物原油は、この日発表の米国エネルギー情報局(EIA)の週報で、前週末の原油在庫は前週末比670万バレル増加(市場予想:340万バレル減)と積み増しとなったものの、ガソリン在庫が480万バレル減(市場予想:横ばい)と取り崩しとなったこと、また、中国上海株式市場で2年5か月ぶりの高値記録したことを好感、需給改善への期待感が高まり、3営業日ぶりに反発した。さらに、為替市場におけるドル安・ユーロ高の進行による原油先物の割安感も反発要因となった。8月限の終値は前日比0.28ドル高の40.90ドル、9月限の終値は同0.34ドル高の

41.04ドル。

EIAによると、7月6日時点のガソリンの小売価格は、前週比0.3セント値上がりの1ガロン2.177ドル(62.4円/ℓ)、ディーゼルは同0.7セント値上がりの2.437ドル(69.9円/ℓ)となった。ガソリンは10週連続の値上がり、ディーゼルは5連続の値上がりだった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2020年6月28日～7月4日に休止したトッパー能力は75.6万バレル/日で、前週に対して7.3万バレル/日減少した(全処理能力は351.9万バレル/日)。

原油処理量は240.0万klと、前週に比べ7.2万kl減少。前年に対しては86.1万klの減少。トッパー稼働率は61.3%と前週に対して1.8ポイントの減少、前年に対しては22.0ポイントの減少となった。

生産は前週に比べてガソリン、灯油が減産となり、その他の油種で増産となった。ガソリン/6.5%減、ジェット/192.4%増、灯油/55.9%減、軽油/1.3%増、A重油/30.9%増、C重油/47.5%増。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.5万kl減)。軽油の輸出は3.4万kl(前週比3.4万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は前週比で灯油、軽油が減少となり、その他の油種で増加となった。前年比ではA重油、C重油が増加となり、その他の油種で減少となった。ガソリンの出荷は85.0万kl(対前週2.9%増)と2週連続で増加となり、46週連続で100万klを下回った。ジェット10.0万kl(対前週86.9%増)、灯油5.8万kl(対前週51.6%減)、軽油53.3万kl(対前週12.0%減)、A重油15.2万kl(対前週5.3%増)、C重

油15.9万kl(対前週28.2%増)。

(単位: 千KL)

	今週 (6/28 ~ 7/4)	前週 (6/21 ~ 6/27)	前週比
ガソリン	850	826	▲ 24 (3%)
ジェット燃料	100	54	▲ 46 (85%)
灯油	58	121	▼ -63 (-52%)
軽油	533	606	▼ -73 (-12%)
A重油	152	145	▲ 7 (5%)
C重油	159	124	▲ 35 (28%)
合 計	1,852	1,876	▼ -24 (-1%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

7月4日時点の在庫は、ガソリン、灯油が取り崩しとなり、その他の油種で積み増しとなった。

ガソリンは161.3万kl、前週差7.2万kl減。前年に対しては12.4万kl多い。

灯油は174.1万kl、前週差5.6万kl減。前年に対しては21.4万kl多い。

軽油は155.6万kl、前週差8.4万kl増。前年に対しては29.6万kl多い。

A重油は79.5万kl、前週差2.4万kl増。前年に対しては10.0万kl多い。

C重油は185.8万kl、前週差2.5万kl増。前年に対しては11.6万kl少ない。

(単位: 千KL)

	今週 (7/4)	前週 (6/27)	前週比
ガソリン	1,613	1,685	▼ -72 (-4%)
ジェット燃料	723	662	▲ 61 (9%)
灯油	1,741	1,797	▼ -56 (-3%)
軽油	1,556	1,472	▲ 84 (6%)
A重油	795	771	▲ 24 (3%)
C重油	1,858	1,833	▲ 25 (1%)
合 計	8,286	8,220	▲ 66 (0.8%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

6月30日～7月6日の原油価格は、前週比で値上がりし、
為替も円安で、原油コストは値上がりしたものと見られる。
これを受けて、次週の大手元売卸価格は、ガソリン・灯
油・軽油ともに、全社1.0円の値上げとなった。

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

6月30日～7月6日の製品スポット市況は、6月23日～29日
平均と比べ、全油種・全取引で、値上がりした。

直近(6/30～7/6)の陸上スポット価格平均値(千葉・川崎・
中京・阪神の4地区の陸上ラック価格)は、前週比で、ガソリン
は1.8円の値上がり、灯油は2.8円の値上がり、軽油は2.1円
の値上がりだった。直近(6/30～7/6)において、ガソリンは
93～94円台で値上がり後横ばい、灯油は41～42円台で値
上がり後横ばい、軽油は42～43円台で値上がり後横ばい
で推移した。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、同期間、前週比
で、ガソリンは1.2円の値上がり、灯油は1.3円の値上がり、軽
油は0.8円の値上がりだった。海上スポット価格は、同期間
に、ガソリンは95～96円台で値上がり後横ばい、灯油は38～
39円台で値上がり後出入り、軽油は43～44円台で値上がり
後横ばい、で推移した。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンが0.6円の値上
がり、灯油は0.3円の値上がり、軽油は0.7円の値上がりだ
った。先物価格は、同期間に、ガソリンは92～93円台で値上
がり、灯油40円台で値上がりで、軽油45～46円台で値上がり
で推移した。

(RIM)		(単位: 円/ℓ)		
ス ポ ツ ト 価 格	陸上ローリー 4地区平均	今週 (6/30 ~ 7/6)	前週 (6/23 ~ 6/29)	前週比
	レギュラー	40.8	39.0	▲ 1.8
	灯油	42.3	39.5	▲ 2.8
	軽油	43.0	40.9	▲ 2.1

(TOCOM)		(単位: 円/ℓ)		
[期近物/終値] [平均]		今週 (6/30 ~ 7/6)	前週 (6/23 ~ 6/29)	前週比
先物価格	レギュラー	39.5	38.9	▲ 0.6
	灯油	40.3	40.0	▲ 0.3
	軽油	46.2	45.5	▲ 0.7

※上記価格は税抜き価格

参考値 (6/30～7/6実績値) (単位: 円/ℓ)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 1.8	▲ 0.6	▲ 1.2
灯油	▲ 2.8	▲ 0.3	▲ 1.5
軽油	▲ 2.1	▲ 0.7	▲ 1.4
A重油	▲ 1.3		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

7月6日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.2円高の
131.3円、軽油も同0.2円高の112.0円、灯油は18ℓベースで
同3円高の1,413円(1ℓベースでは同0.2円高の78.5円)。ガ
ソリンは8週連続の値上がり、軽油は8週連続の値上がり、灯
油も7週連続の値上がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは35都府
県、横ばいは2県、値下がり10道府県となった。全国最安
値は徳島県の120.5円(同0.4円高)、その次に安いのが岡山
県の124.4円(同0.2円安)、最高値は長崎県の141.3円(同
0.6円安)。最も値上がりしたのは、同1.8円高の山梨県

(132.7円)、横ばいは高知県・宮城県のみ、最も値下がりし
たのは、同1.2円安の山口県(128.8円)だった。

先週の原油コストは値上がりし、今週適用の大手元売の
卸価格は、ガソリン・軽油・灯油とも、全社1.0円の値上げと
なった。今週は、原油価格は値上がりし、為替レートも円安
で、原油コストは値上がりした。次週適用の元売の卸価格
は、ガソリン・軽油・灯油ともに、全社1.0円の値上げとな
った。次回調査時(7月13日)のガソリンの小売価格は、小幅
な値上がりが見込まれる。

(単位: 円/ℓ)

(資工公表)		今週 (7/6)	前週 (6/29)	前週比	直近高値	
[週動向]						
小 売 価 格	レギュラー	131.3	131.1	▲ 0.2	08/8/4	185.1
	灯油	78.5	78.3	▲ 0.2	08/8/11	132.1
	軽油	112.0	111.8	▲ 0.2	08/8/4	167.4

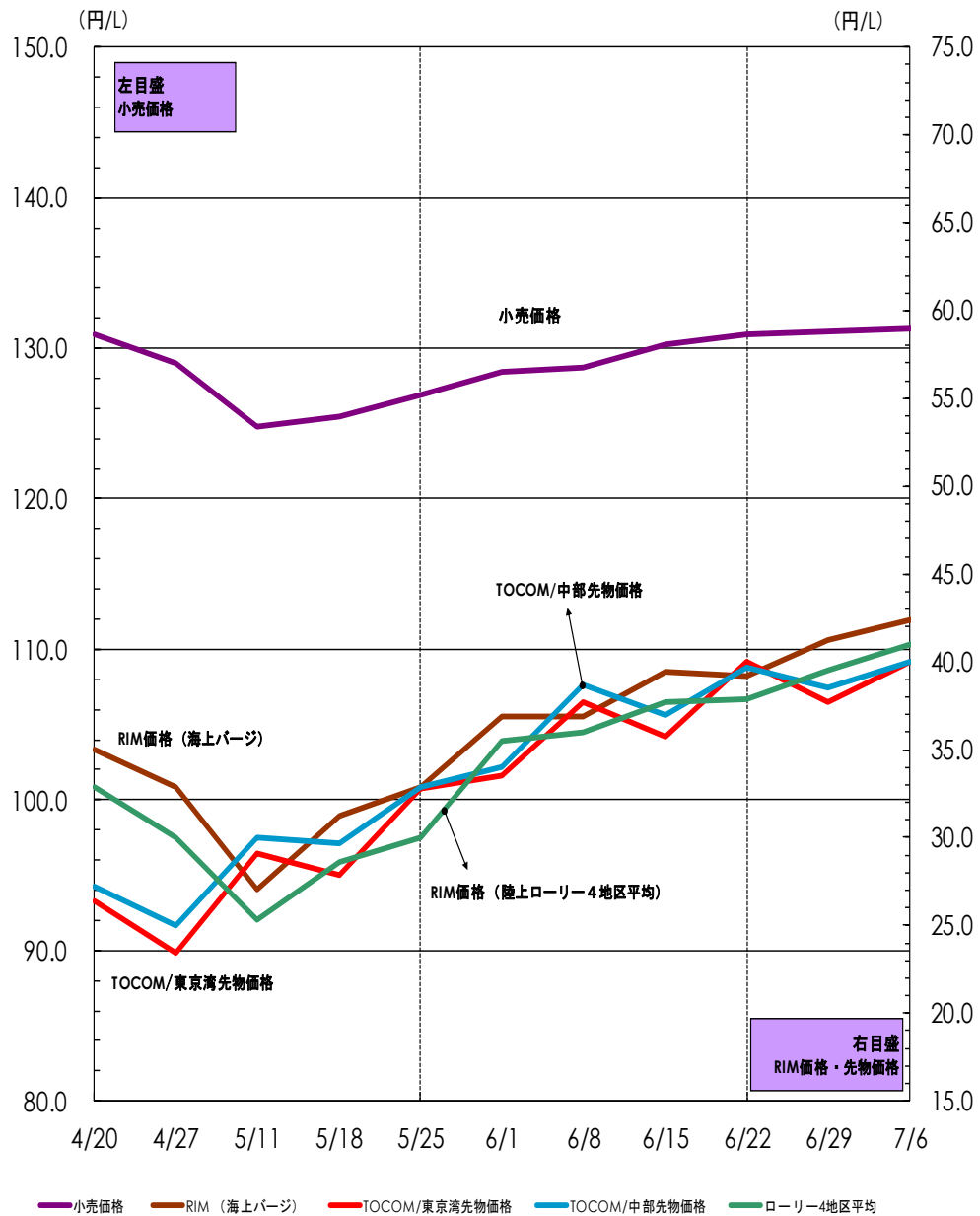
※ 現金一般価格の全国平均値(消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2020/4/20 ~ 2020/7/6)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回(2020第4号)の公表は、7/17(金) 14:00 です。

「セルフSS出店状況」(令和元年9月末現在)は、12月25日(水) 14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターへドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange: NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange: TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate: 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾 及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPIに掲載)。